ICU 日本語教育研究 15：pp.3-20　論文
©2018 国際基督教大学　グローバル言語教育研究センター

# 文学作品の用例から探る女性発話による「ええ」の使用について
## ―宮本百合子『伸子』、有島武郎『或る女』、吉屋信子『花物語』―

金山　泰子　　国際基督教大学
二宮　理佳　　中央大学

[要旨]
『伸子』（1924 ～ 1926）『或る女』（1911 ～ 1913）『花物語』（1916 ～ 1924）における応答詞「ええ」の使用状況を調べた結果、「『ええ』＋常体」という形を使っているのは女性のみという点で 3 作品において共通点が見られた。つまり、男性は「ええ」を敬体の会話でしか使用していなかったのに対し、女性は「ええ」を敬体のみならず常体でも使用していたということである。
換言すると「ええ」は、男性にとっては改まった表現であるが、女性にとっては、フォーマルでもあり、またくだけた会話でも使える表現だということになる。本結果は『痴人の愛』（1924 ～ 1925）を対象とした 2017 年の調査結果を補完する結果となっている。1911 年から 1924 年頃、つまり明治末期から大正期にかけての「ええ」の使用傾向の一端を示していると考察した。
最後に、応答詞「ええ」の歴史的変遷、および現代における使用状況の調査を今後の調査課題として挙げた。

[キーワード]
ええ　　性差　　敬体会話　　常体会話　　女性語

### 1　はじめに
「ええ」は一般的には「はい」よりややくだけた肯定表現という認識で取り上げられており、その違いについては詳しくは言及されていない（二宮・金山 2008）。しかしながら「はい」と「ええ」には、その改まり度以外にも違いはあるのではないかと考えたのが本研究のきっかけである。先行研究においては、「はい」と「ええ」の比較、または相づちとしての「ええ」を対象とした研究は散見される。また「はい」「うん」「そう」等に着目した研究も見られる（富樫 2002 他）。しかし、応答表現の「ええ」のみを対象とした研究は管見では僅少である。
そこで筆者らは、先行研究をふまえた上で、アンケート、インタビュー、教科書分析、漫画、テレビ番組、文学作品など、様々な媒体を使用して、「ええ」の機能についての調査研究を試みてきた（二宮･金山 2006 他）。その過程において、谷崎潤一郎『痴人の愛』の作品に現れる「ええ」の用例分析を行った結果、男性発話者と女性発話者の「ええ」の使用に以下のような違いが見られた。男性発話者は敬体（「です･ます」体）と共に「ええ」を使用し、女性発話者は敬体・常体共に「ええ」を使用するという違いである（金山・二宮 2017）。

このような性差による「ええ」の使い分けはいつ頃から、どのような経緯で現れたのだろうか。その一端を探るためには、さらに時代、作家、作品を幅広く網羅して用例収集を進め、調査する必要がある。そこで本稿では、応答詞「ええ」の使用例について、『痴人の愛』と同時代の数種の文学作品を対象に用例分析を行う。以下では、調査の概要、結果、考察を述べる。

## 2　調査方法

### 2－1　分析対象作品

本調査の用例分析対象としたテキストは、宮本百合子『伸子』（新潮文庫 1978 年版）、有島武郎『或る女』（新潮文庫 2016 年版）、吉屋信子『花物語上』（河出文庫 2017 年版）『花物語下』（河出文庫 2016 年版）の 3 作品である。これらを分析対象として選んだ理由は、①女性が主たる登場人物であり、女性としての個性が強く描かれていること、②女性による発話が多いこと、③前回の調査対象作品であった『痴人の愛』が出版された 1924 年から遡って 10 年くらいのスパンで出版された作品であることである。なお『花物語』は登場人物のほとんどが女性であるが、これは、「ええ」の使用における男女差よりも、当時の女性による「ええ」の使用状況を浮かび上がらせることを目的としたためである。主たる登場人物は、個の人格として描かれているというよりも、当時の「少女」「女学生」というタイプとして描かれており、当時の女性言葉の一つの特徴的な用例ではないかと考えた。以下では、それぞれの作品の成立背景および概要について述べる。

1）宮本百合子『伸子』

『伸子』は 1924 年から 1926 年にかけて雑誌『改造』に発表された作品であり、作者自身の恋愛、結婚から離婚に至るまでの経験をもとに書かれた自伝的作品である。伸子は裕福な中流家庭の子女であり、父の商用に伴ってアメリカに遊学している間に、現地の日本人留学生である佃という男と出会い、恋愛関係となる。佃は、社会的にも経済的にも伸子の家庭環境と釣り合う男ではなかったが、伸子は周囲の反対を押し切り結婚する。しかし閉鎖的な夫との結婚生活は破綻し、信子は自分の道を踏み出していこうと決意して離婚する。

2）有島武郎『或る女』

『或る女』は、1911 年から 1913 年にかけて雑誌『白樺』に連載され、補筆を経て 1919 年に刊行された。主人公・葉子は、多くの男から言いよられ、女学生の間でも流行を風靡するような、美貌と才気にあふれる女である。従軍記者として名を上げた詩人・木部と恋愛結婚するが、2 か月で離婚した後、女児を産む。その後、周囲の勧めで木村という男と婚約し、彼の待つアメリカへ渡ろうとするが、渡航中に船の事務長である倉知という既婚の男と恋愛関係となり、アメリカへ渡らずそのまま帰国してしまう。二人の関係は新聞沙汰となり世間から批判を受けるが、葉子は婚約者も子供も捨てて、倉知との愛に生きようとする。しかし、やがて倉知は去り、葉子自身も病に冒されることとなる。

3）吉屋信子『花物語』

花にちなんだ短編連作集で、1916 年から 1924 年まで雑誌『少女画報』に断続的に連載され、1925 年 7 月から 1926 年 3 月にかけて『少女倶楽部』に 3 編が連載された。1 話ごとに女学生が花にまつわるエピソードを互いに告白するという設定で書かれており、女学生同士の友愛や憧れがテーマとなっている。

表 1 は上記作品を執筆年代順に並べたものである。有島武郎は 1923 年に自殺しているが、『伸子』には、有島の自殺を知らせる新聞記事を読んだ伸子が驚愕する場面が描かれている。また『痴人の愛』では、主人公ナオミが有島の『カインの末裔』を愛読している場面が描かれており、これらの作品が同時代を生きた人物を描いているということがうかがえる。

**表 1　対象作品の執筆年代**

| 執筆年代 | 作品 |
|---|---|
| 1911 ～ 1913（明治 44 ～大正 2） | 『或る女』有島武郎 |
| 1916 ～ 1924（大正 5 ～ 13） | 『花物語』吉屋信子 |
| 1924 ～ 1926（大正 13 ～ 15） | 『伸子』宮本百合子 |
| 1924 ～ 1925（大正 13 ～ 14） | 『痴人の愛』谷崎潤一郎 |

## 2－2　調査の方法

調査の方法については、金山・二宮（2017）とほぼ同様の手順で以下のように行った[(1)]。

1）作品中に表れる「ええ」の用例を全て抽出し、発話者ごとにまとめた。
2）「ええ」が出てくる発話の直前の会話文を「先行文」として示し、その発話者と性別も付記した。
3）「ええ」を含む会話文をそのまま抜き出し「応答表現＋後続文」として示した。
4）「ええ」を含む会話文の文体（敬体か常体か）という点に着目した。

上記 1）、2）、3）の情報を一覧化したものが添付資料 1・2・3 である。次節では、発話者の性差により、「ええ」を含む会話文の文体はどのように異なるか、また性差による表現の異同が見られるかを、用例を挙げつつ分析する。

## 3　調査結果

「ええ」を含む会話文の文体が、男性発話者と女性発話者によって異同があるかを調査したところ、以下のような傾向が見られた。女性発話者は、常体（普通体 / くだけた会話）においても、敬体（「です・ます」体の会話）においても、「ええ」を用いていた。一方、男性発話者は、敬体（「です・ます」体の会話）の中でしか「ええ」を用いていなかった。以下の表を見られたい。

**表２　『伸子』『或る女』『花物語』における「ええ」発話の男女別使用例**

| 作品名 | 性別 | 「ええ」総数 | 敬体 | 常体 | その他<br>（後続文無し） |
|---|---|---|---|---|---|
| 伸子 | 男 | 4 | 4 | 0 | 0 |
| | 女 | 22 | 6 | 13 | 3（「ええ」のみ） |
| 或る女 | 男 | 6 | 2 | 0 | 4（「ええ」のみ） |
| | 女 | 17 | 9 | 6 | 2（「ええ」のみ） |
| 花物語 | 男 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 女 | 65 | 25 | 34 | 6 |

表 2 は、『伸子』『或る女』『花物語』における「ええ」の使用状況をまとめたものである。発話者の性別ごとに、「ええ」使用の総数を数えた。さらに「ええ」の後続文を敬体か常体かに分けて数えた。後続文がない用例は「その他」とした。

発話が完結していない場合（例：「ええ確かに……」）は、前後の文章の流れから敬体か常体か判断した。また常体・敬体については、「ええ」の直後に続く文の文末で判断した。例えば「ええ、わかったわ、私達のお見舞いに行ってあげたことを喜こんでいらっしたんでしょう。」の用例は敬体として数えた。

『伸子』においては、「ええ」の総数は 26 用例で、そのうち女性発話の用例は 22 用例、男性発話は 4 例だった。女性発話の 22 用例の中で、敬体の発話の中での使用が 6 例、常体の発話の中での使用が 13 例、その他（後続文なし）が 3 例だった。男性発話の 4 用例は、全て敬体の発話の中での使用で、常体発話の中での使用はなかった。

『或る女』においては、「ええ」の総数は 23 用例で、そのうち女性発話の用例は 17 用例、男性発話は 6 例だった。女性発話の 17 用例の中で、敬体の発話の中での使用が 9 例、常体の発話の中での使用が 6 例、その他（後続文なし）が 2 例だった。男性発話の 6 用例は、敬体発話の中での使用が 2 例、その他（後続文なし）が 4 例、常体の発話の中での使用はなかった。

『花物語』においては、「ええ」の総数は 65 用例だった。この作品の主たる登場人物がほぼ全て女性であるため、全て女性発話の用例だった。敬体の発話の中での使用が 25 例、常体の発話の中での使用が 34 例、その他（後続文なし）が 6 例だった。

以下では、女性発話者が「ええ」を常体の中で使用している用例、女性発話者が敬体の中で「ええ」を発話している用例、男性発話者が敬体の中で「ええ」を使用している用例について、各作品から 1 例ずつ紹介する。なお用例に付した下線は筆者によるものである。

### ３－１　女性発話者が常体の中で「ええ」を使用している用例

用例 1：『伸子』

【場面】植物学者の阪部が伸子に数枚の写真を見せ、その写真の関係について説明する。

阪部（男）「――関係がわかりますか？」

伸子（女）「<u>ええ</u>、判った！　判った！」

用例 2：『或る女』
【場面】古藤が木村（葉子の婚約者で古藤の友人）がアメリカで生活に困っていることを伝える。
古藤（男）「困っているようですね。」
葉子（女）「ええ、少しはね」

用例 3：『花物語』
【場面】君恵（姉）はさち子（妹）にピアノかオルガンを買ってやることができない。代わりにミニオルガンでもいいかと尋ねる。

君恵（女）「ね、さあちゃん、いくらそれだって、あの無いよりはいいでしょう―」
さち子（女）「ええ、――うちにあれば嬉しい――」

### 3－2　女性発話者が敬体の中で「ええ」を使用している用例

用例 4：『伸子』
【場面】伸子の英語教師であるミス・プラットは、伸子が佃と付き合うことを心配して尋ねる。

ミス・プラット（女）「佃さんが話しましたか」
伸子（女）「ええ、ききました。（後略）」

用例 5：『或る女』
【場面】古藤（葉子の元夫の友人で、現婚約者の友人）は、葉子が婚約者に会うために渡米する準備を色々手伝っている。葉子のわがままさに多少あきれている。

古藤（男）「あなたは一体まだはらが痛むんですか」
葉子（女）「ええ、少しはよくなりましてよ」

用例 6：『花物語』
【場面】観音様の御堂で熱心に祈る美しい少女に、堂守の翁が何を祈っているのかと尋ねる。少女は大切な手毬を失くしたという。

翁（男）「ふうむ、何かその手毬に故あってか」
少女（女）「ええ、その手毬は私の仕える御邸の奥方の御品でございます」

以上の用例に見られるように、女性による発話では「ええ」は、常体、敬体のいずれにおいても使われている。

次項では男性発話者による「ええ」の用例を示す。男性発話による「ええ」は敬体のみで使われている。

### 3－3　男性発話者が敬体の中で「ええ」を使用している用例

用例 7：『伸子』

【場面】伸子と佃は出会ったばかりである。伸子は佃の専門である比較言語学に興味を持ち話を聞く。2 時間程話した後、佃が病人の見舞いに行くと言って立ち上がる。

伸子（女）「日本人の方？」

佃（男）「ええ、そうです。（後略）」

用例 8：『或る女』

【場面】婚約者に会うためにアメリカに向かう船中で、葉子は純粋な年下の青年岡に出会う。岡は葉子に憧れを抱く。岡は本当はボストンに行く予定だったが、葉子と同じシカゴに行きたくなったと話す。

葉子（女）「あなたもシカゴにいらっしゃるとおっしゃってね、あの晩」

岡（男）「ええ、云いました。（後略）」

『花物語』については、主たる登場人物がほぼ女性であるため、男性発話 による「ええ」の用例は見つからなかった。

## 4　考察および今後の課題

『伸子』『或る女』『花物語』における応答詞「ええ」の使用状況を調べた結果、「『ええ』＋常体」という形を使っているのは女性のみという点で 3 作品において共通点が見られた。つまり、男性は「ええ」を敬体の会話でしか使用していなかったのに対し、女性は「ええ」を敬体のみならず常体でも使用していたということが見出された。「ええ」は「はい」より改まり度が下がるが、ビジネスの場など改まった場でも使用可能であり、改まり度は低くない応答表現である。その「ええ」が、女性話者に限っては「常体の会話の中」、つまりくだけた会話の中に使用されていたという点が、新たな知見として本調査で見出された点である。

言い換えると、「ええ」は、男性にとっては改まった表現だということである。他方、女性にとっては「ええ」は、改まった表現でもあり、またくだけた会話でも使える表現だということになる。上記の結果は 2017 年の調査結果を補完する結果となっている。つまり、『或る女』（1911 ～ 1913）、『花物語』（1916 ～ 1924）、『伸子』（1924 ～ 1926）、『痴人の愛』（1924 ～ 1925）の 4 作品において、同様の傾向が見られたということである。作品数が限られており、この結果がこの時代に特有の傾向であると述べるのは拙速であるが、1911 年～ 1924 年頃、つまり明治末期から大正期にかけての「ええ」の使用傾向の一端を示していると言えるのではないだろうか。今後、作品数を増やし、さらなる検討を加えたいと考えている。また上記 4 作品は、自立しようとする強い女性、自我の強い女性、女学生が主たる登場人物であるが、今後は異なるタイプの人物を描いた作品も分析の対象としたい。

今回の結果を踏まえて、あらためて今後の研究課題を以下に整理する。

研究課題 1：男女による「ええ」の使い分けはいつごろ発生したのか。

上記の調査結果が示唆するように、1911 年から 1924 年頃、つまり明治末期から大正末期における応答詞「ええ」は、男女による使い分けがあったと推測される。こうした「ええ」の使い分けが、いつごろ発生したのかを探るためには、さらに広範囲の時代、作品にわたる用例分析を進める必要がある。明治 30 年代（1900 年前後）は日本語に標準語が生まれる過程で、男女の言葉遣いに対する言語規範も同時に形成されたのではないかと考えられる（任利 2009 他）。したがって、さらに時代を遡り明治 30 年代前後に注目した用例分析も課題の一つとして捉えたい。

研究課題 2：男女による「ええ」の使い分けはどのように発生したのか。

男女による「ええ」の使い分けが発生した経緯については、語源にまで遡り検討する必要がある。「ええ」の語源や語義については次のように説明がある。森田（1996）によれば「ええ」の語源は詠嘆・感動を表す感動詞「えい」である。また、角川最新古語辞典（1983）には「えい」の語義の一つとして「驚いたり強く感動したりしたときに発する声（現代の「やあ」「まあ」「ええっ」）」とある（p.86）。しかしながら、改まり度の側面から「ええ」の変遷を明らかにした研究は管見では見つかっていない。そのため、「ええ」の改まり度に焦点を当て調査を進めることも研究課題として据えている。現段階では推測の域を出ないが、「ええ」の発生が丁寧語であったのか、或いはくだけた表現であったのかによって、以下の 2 通りの可能性があるのではないかと考える。

推論①

「ええ」は改まった会話で使われる表現として発生し、使用されてきた。しかしある時点で、女性発話の中では、「ええ」の改まり度が下がり、くだけた「ええ」も出現した。つまり「ええ」の使用範囲が広がったということである。結果、女性の会話の中には「改まった『ええ』」と「くだけた『ええ』」、どちらも存在するという状況が生まれた。一方、男性の発話の中では、発生当初の「改まった『ええ』」しか存在せず、「くだけた『ええ』」は生まれなかった。

推論②

「ええ」はくだけた表現として発生し、使用されてきた。だが次第に改まり度が高い表現に変化していった。結果、男性は「ええ」を改まった表現として使うようになったが、女性語の中では「くだけた『ええ』」も残り、「改まった『ええ』」と「くだけた『ええ』」、どちらも存在するという状況が生まれた。

上記課題は過去から現代への変遷に着目した課題であるが、現代から未来に向かっての「ええ」の変化に着目した調査も視野に入れて考察を進めていきたいと考えている。具体的には以下のような研究課題が挙げられる。

研究課題 3：現代における応答詞「ええ」の使用状況、および今後の変化の方向性

金山・二宮（2017）の調査では、女性の場合は、終助詞「～わ」「～よ／のよ」「～の」

が文末に使われている例が多いことを見出し、「ええ＋わ」「ええ＋よ／のよ」「ええ＋の」は女性特有の発話であり、女性発話による「ええ」には、終助詞が大きく関連していると指摘した。

益岡･田窪（1922）らは、終助詞「わ」を女性的特徴を表す言葉として分類している。しかしながら、中村（2013）も指摘するように、現代の日本女性がこれらの女言葉を使わないことは、多くの実証研究によって明らかにされている。金水（2003）もまた、「てよだわ」に象徴される「近代的〈女性語〉」は衰微にあると述べ（p.172）、「動詞＋わ」などについて、いわゆる「＜お嬢様ことば＞」の典型として多用される役割語の一つとして挙げている（p.130）。

上述の先行研究の知見に鑑みるとともに、女性発話による「ええ」の会話例が、女性語とされる終助詞「わ」「よ／のよ」「の」等の女性語を文末に多く伴うことが見出されたことから、「ええ」もまた女性性を表象する役割語としての側面を有しているのではないかと考えた（金山・二宮 2017）。

しかしながら、女性語「わ」「わよ」などの使用頻度が現在減ってきている（尾崎 1997）ように、女性的な終助詞を共起することが多いと考えられる「ええ」もまた減少していく方向性にあるのかもしれない。映画翻訳の分野においても、これまで王女のような女性キャラクターに多用されてきた「てよだわ」のような表現が使われなくなっていることが報告されている（朝日新聞デジタル 2018 年 9 月 24 日）。とすれば、女性語としての「ええ」は役割語として残るが、日常的には使われなくなり、「ええ」の男女による使い分けはなくなっていく可能性も考えられる。このような推論を検証する足がかりとして、例えば以下のような調査を実施することを考えている。

①現代人が「ええ」をどのように認識し使用しているかについてアンケート、及びインタビュー調査を行う。性差・年代差等による差異を抽出することで、今後の「ええ」の変化の方向について考察する。
②現代の作品の用例分析を行う。一例としては、同じ作者の作品中の応答詞「ええ」の使われ方に変化が見られるか分析する。
③翻訳作品（映画・書籍）を 10 年単位で遡り、「ええ」の使われ方の変化を分析する。

**注**

1. 金山・二宮（2017）では、「ええ」と文末に現れる終助詞（「わ」「よ／のよ」「の」）との共起についても調査したが、今回は調査の対象としていない。

**参考文献**

金山泰子・二宮理佳（2007）「『はい』『ええ』の使い分けに関する意識調査」『ICU 日本語教育研究 3』3-31　国際基督教大学日本語教育研究センター
金山泰子・二宮理佳（2009）「『はい』『ええ』の使い分けに関する調査―漫画を使用したアンケートを通して―」『ICU 日本語教育研究 5』19-44　国際基督教大学日本語教育研究センター

金山泰子・二宮理佳（2017）「文学作品の用例から探る応答表現『ええ』の様相―谷崎潤一郎『痴人の愛』―」『ICU 日本語教育研究 14』17-28　国際基督教大学日本語教育研究センター
北川千里（1977）「『はい』と『ええ』」『日本語教育』33 号 65-72　日本語教育学会
金水敏（2013）『バーチャル日本語役割の謎』岩波書店
阪本俊夫（2001）「現代の社会関係と敬語の可能性」『月刊言語』11 月 34-42　大修館
佐藤謙三・山田俊雄（1983）『角川最新古語辞典』p.86　角川書店
富樫純一（2002）「『はい』と『うん』の関係をめぐって」定信利之編『「うん」と「そう」の言語学』pp.127-157　ひつじ書房
富樫純一（2013）「感動詞・応答詞の分析手法」『日本語学　特集ことばの名脇役たち』2013 年 4 月臨時増刊号 vol.32-5, 26-35　明治書院
中村桃子（2013）『翻訳がつくる日本語―ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社
二宮理佳・金山泰子（2006）「『ええ』の機能についての一考察―『はい』との比較を通して―」『ICU 日本語教育研究 2』51-63　国際基督教大学日本語教育研究センター
二宮理佳・金山泰子（2008）「初級教科書に現われる『ええ』についての調査報告―初級における応答表現指導についての一考察―」『ICU 日本語教育研究 4』39-57　国際基督教大学日本語教育研究センター
二宮理佳・金山泰子（2010）「『はい』『ええ』の使い分けに関する考察―テレビ映像を使用したインタビュー調査を通して―」『ICU 日本語教育研究 6』3-13　国際基督教大学日本語教育研究センター
任利（2009）『女ことばは女が使うのかしら』ひつじ書房
日向茂男（1979）「談話における『はい』と『ええ』の機能について」『国立国語研究所報告』65 号 215-229　国立国語研究所
藤えりか（2018）「変わりゆく言葉の性差　女性語もう使いませんものね」『朝日新聞デジタル』2018 年 9 月 24 日（アクセス日：2018 年 9 月 25 日）
〈https://www.asahi.com/articles/ASL9F3VSJL9FUCFI002.html?iref=pc_rellink〉
メイナード・K・泉子（2013）「あいづちの表現性」『日本語学　特集ことばの名脇役たち』2013 年 4 月臨時増刊号 vol.32-5, 26-35　明治書院
森田良行（1996）『意味分析の方法―理論と実践―』ひつじ書房
McGloin, Naomi H.（1991）Hai and Ee : An Interactional Analysis. *Japanese/Korean Linguistics*.

**用例出典**

有島武郎　『或る女』　新潮文庫　平成 28 年 3 月 5 日
宮本百合子　『伸子』新潮文庫　昭和 53 年 11 月 15 日
吉屋信子　『花物語　上』2017 年 9 月 30 日
　　『花物語　下』平成 28 年 3 月 5 日

資料１：『伸子』応答表現用例
「ええ」の発話者：伸子（女）

| 先行文 | 発話の相手 | 性別 | 応答表現 | 応答表現＋後続文 | 頁 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「お父様と御一緒だって？」 | 安川 | F | ええ | 「ええ。腰巾着」 | 13 | 17 |
| 「留守ですか？」 | 平野 | M | ええ | 「ええ。――私一寸その辺へ出て見ようと思って」 | 37 | 13 |
| 「しかし、こんな時独りで歩くのはよくありませんよ」 | 平野 | M | ええ | 「ええ。ほんのその辺」 | 38 | 2 |
| 「佃さんが話しましたか」 | ミス・プラット | M | ええ | 「ええききました。でも、なぜああなたにそんな他人の噂を喋る必要があったのでしょう」 | 80 | 4 |
| 「お一人ですか?」 | 佃 | M | ええ | 「ええ」 | 91 | 1 |
| 「行こうじゃないか」 | 母 | F | ええ | 「ええ。――でも赤ちゃんを見たいわ、前に」 | 134 | 14 |
| 「お前がたのことさ、いずれ。――あのひと、長男じゃないっていう話だったね」 | 母 | F | ええ | 「ええ、なぜ？」 | 185 | 17 |
| 「あれを見て置いてくれた?」 | 佃 | M | ええ | 「ええ」 | 213 | 1 |
| 「休みでしょう、まだ」 | 横田 | M | ええ | 「ええ、近いうちに学校へ宮様がいらっしゃるんですって、その相談よ」 | 292 | 12 |
| 「行きますか？」 | 佃 | M | ええ | 「ええ、行ってよ！」 | 327 | 5 |
| 「――関係がわかりますか？」 | 佃 | M | ええ | 「ええ、判った！　判った！」 | 384 | 18 |
| 「伸子さん、ゆっくりできるんでしょう」 | 佐保子 | F | ええ | 「ええ、今日はすっかり楽しむ積りなの」 | 417 | 16 |
| 「動坂へ行ったんだって？」 | 佃 | M | ええ | 「ええ」 | 426 | 5 |
| 「どうしても？」 | 佃 | M | ええ | 「――ええ。――どうしても・・・・・・・・」 | 455 | 4 |

「ええ」の発話者：看護婦（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「そんなことは私の自由です。私はちゃんとあの人の父親からたのまれて出入りすることを許されているのです」 | 佃 | M | ええ | 「ええ、それはよく承知しています。（後略）」 | 66 | 10 |

「ええ」の発話者：老婦人（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「今日は木曜日でしょう？」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ確かに・・・・・・・・」 | 77 | 16 |

「ええ」の発話者：安川（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「買いもの」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ一寸」 | 92 | 12 |

「ええ」の発話者：直子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「よく早くお出かけになってね」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ。私このくらい普通ですわ――（後略）」 | 116 | 15 |
| 「――外套なんぞ、脱いでおしまいになった方がいいわ」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ、でも――そうもお邪魔していられないから・・・・・・・」 | 117 | 1 |

「ええ」の発話者：女中（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「じゃ、日帰りできるね」 | 佃 | M | ええ | 「ええゆっくりでございますよ、（後略）」 | 330 | 14 |
| 「――もっといれば云ってよこすわ、送ってくれるわね」 | 伸子 | F | ええ | 「ええそりゃ――」 | 429 | 12 |

「え」の発話者：母（多計代）（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「いいのね、いつお買いになったの」 | 伸子 | F | え | 「え」 | 208 | 13 |

「え」の発話者：母（多計代）（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「何かお話があるの？」 | おとよさん | F | え | 「え・・・・・・少し・・・・・・いろいろ私も先々のことを考えますもんですから――」 | 229 | 6 |

「ええ」の発話者：素子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「――あれ、全くつまらない雑誌ね」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ。金をかけないんだから、とてもいいものはできないんです、（後略）」 | 416 | 12 |

「ええ」の発話者：佃（男）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「――日本人の方？」 | 伸子 | F | ええ | 「ええそうです。もう大分いいのですが、毎週一遍ずつ行ってやることにしているので待っているでしょう。」 | 26 | 9 |
| 「おでかけですか？」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ・・・・・・・・・・・・・考えて来たことがあるもんで・・・・・・もし、貧乏書生の懐にかなうところでもありましたら、ちょっと出かけようかと思います」 | 326 | 2 |
| 「――どこかへいらっしゃるんだったの？」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ、君も支度して下さい」 | 378 | 9 |

「ええ」の発話者：織田（男）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「多分八時ごろになるでしょうと思うけれど――あなた――そこにいらっしゃるの？」 | 伸子 | F | ええ | 「ええ、昨晩泊まったんです――ではどうぞ」 | 449 | 9 |

資料 2：『或る女』応答表現用例
発話者：葉子（女性）

| 先行文 | 発話の相手 | 性別 | 応答表現 | 応答表現＋後続文 | 頁 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ひどく痛むんですか」 | 古藤 | M | ええ | 「ええ可なりひどく」 | 25 | 16 |
| 「気分はもうなおりましたね」 | 古藤 | M | ええ | 「ええ」 | 33 | 6 |
| 「あなたは一体まだはらが痛むんですか」 | 古藤 | M | ええ | 「ええ、少しはよくなりましてよ」 | 45 | 11 |
| 「僕はねえ」 | 岡 | M | ええ | 「ええ」 | 169 | 14 |
| 「私の電報をビクトリヤで受け取ったでしょうね」 | 木村 | M | ええ | 「ええ、有難うございました」 | 237 | 14 |
| 「何かあなた非難を受けるような事でもしたんですか」 | 木村 | M | ええ | 「ええええ沢山しましたとも」 | 248 | 1 |
| 「姉さまそんなもの吸っていいの？」 | 貞世（妹） | F | ええ | 「ええこんな悪い癖がついてしまったの。（後略）」 | 322 | 10 |
| 「前略　若しあなたが誤解の中にいるんなら聞かせて下さい。僕はこんな重大な事を一方口で判断したくはありませんから」 | 古藤 | M | ええ | 「ええ、それはお聞き下さればどんなにでもお話はしましょうとも。（後略）」 | 337 | 4 |
| 「今日は私少しお願いがあるんですが皆さま聴いて下さるでしょうか」 | 岡 | M | ええ | 「ええええ、あなたの仰有る事なら何んでも・・・・・・（後略）」 | 448 | 6 |
| 「何を思い違いをしとる、これ」 | 倉知 | M | ええ | 「ええ、殺すなら殺して下さい・・・・・・・・下さいとも」 | 489 | 2 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ローマンスの沢山ある女はちがったものだな」 | 倉知 | M | ええ | 「ええ、その通り・・・・・・・・あんな乞食みたいな見っともない恋人も持った事があるのよ」 | 509 | 10 |
| 「夢でも御覧になりましたか、大層なお声だったものですから、つい御案内も致さず飛び込んで仕舞いまして」 | 番頭 | M | ええ | 「ええ夢を見ました。(後略)」 | 539 | 15 |
| 「貞ちゃん矢張り駄々をこねるか」 | 倉知 | M | ええ | 「ええ、仕様がなくなっちまいました。(後略)」 | 541 | 6 |
| 「困っているようですね」 | 古藤 | M | ええ | 「ええ、少しはね」 | 548 | 8 |

発話者：古藤（男性）

| 先行文 | 発話の相手 | 性別 | 応答表現 | 応答表現＋後続文 | 頁 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「・・・・・・あなたのような方から御覧になったら、さぞいやな気分がなさいましょうねえ」 | 葉子 | F | ええ | 「ええ」 | 48 | 4 |
| 「そんな事どうでもよござんすわ。あなたお丈夫でしたの」 | 葉子 | F | ええ | 「ええ」 | 291 | 12 |
| 「(前略)、あなたは一体私をどうお思いになって」 | 葉子 | F | ええ | 「ええ、本当を云いましょう」 | 332 | 4 |
| 「(前略)、然し苦しい事も偶にはおありだろうな」 | 倉知 | M | ええ | 「ええ」 | 463 | 11 |

発話者：岡（男性）

| 先行文 | 発話の相手 | 性別 | 応答表現 | 応答表現＋後続文 | 頁 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「シカゴの大学にもでいらっしゃいますの」 | 葉子 | F | ええ | 「ええ」 | 158 | 4 |
| 「あなたもシカゴにいらっしゃると仰ってね、あの晩」 | 葉子 | F | ええ | 「ええ、云いました。(後略)」 | 169 | 5 |

発話者：愛子（女性、葉子の妹）

| 先行文 | 発話の相手 | 性別 | 応答表現 | 応答表現＋後続文 | 頁 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「あなた方もあげるの」 | 葉子 | F | ええ | 「ええたまに」 | 389 | 9 |
| 葉子は少し激しい言葉になった。「何んだって又こんな本を送っておよこしになさったんだろう。あなたお手紙でも上げたのね」 | 葉子 | F | ええ | 「ええ、・・・・・・下さいましたから」 | 473 | 4 |
| 発話者：貞世（女性、葉子の妹） | | | | | | |
| 先行文 | 発話の相手 | 性別 | 応答表現 | 応答表現＋後続文 | 頁 | 行 |
| 「貞ちゃんは今勉強が済んだのか」 | 倉知 | M | ええ | 「ええ今済んでよ」 | 447 | 16 |

資料３：吉屋信子『花物語（上)』『花物語（下)』＊各エピソードのタイトルを「」内に記した。
(上巻)
「べにばらしろばら」
発話者：雪子

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ふたありで、ゆびきりをして、一生仲よくすると、約束しましょうね」 | 麗子 | F | ええ | 「ええ、きっと、お約束してよ、もし、この約束を破ったら、このゆびはくさってしまうのね」 | 88 | 16 |

「紅梅白梅」
発話者：順子

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「裁縫室へ順子さんいらっしゃいな、私がちょっと縫い合せてあげるわ」 | 友だち | F | ええ | 「ええ、ありがとう」 | 118 | 11 |
| 「あのう、お姉さま――私が伯父さんの子になれば――あのう、お母さまはお姉さま一人育てればいいのねぇ――」 | 澄江(妹) | F | ええ | 「ええ、そうね」 | 121 | 5 |

「紅椿」
発話者：少女

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ふうむ、何かその手毬に故あってか」 | 翁 | M | ええ | 「ええ、その手毬は私の仕える御邸の奥方の御品でございます」 | 137 | 2 |
| 「ふむ、いくら御主人の品とはいえ、たかが知れた手毬一つ、さまでの御とがめもあるまいに」 | 翁 | M | ええ | 「ええ、それはもう、お優しい奥方ゆえ、なんのおとがめもございませんけれども、それでは私が申し訳けがございません。（後略）」 | 137 | 6 |

「雛芥子」
発話者：志磨（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「私入ってもいいでしょう、そのお部屋へ」 | 少女 | F | ええ | 「ええいらっしゃい、そしてこの敷物の上で踊ってごらんなさい」 | 145 | 11 |

「白芙蓉」
発話者：章子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 無し | | | ええ | 「ええ、その事ならお邸仲中の大評判よ、（後略）」 | 183 | 14 |

発話者：静枝（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「けれども、あれから、あの家庭教師の方も少しはやさしくなったでしょう」 | 章子 | F | ええ | 「ええ、そりゃあ、もうすっかり閉口して御自分でお邸を退いてしまったの」 | 185 | 12 |

「福寿草」
発話者：伯母さん（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「あら！ほんとう？どうして？」 | 薫 | F | ええ | 「ええ、ほんとうですとも、（後略）」 | 189 | 7 |

発話者：夫人（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「あのなんですのね、私達でみな買い上げてしまったら御面倒が無くていいでしょうね・・・・・・」 | 夫人 | F | ええ | 「ええ、そりゃあ、たかの知られたものですもの――ねえ、――」 | 200 | 12 |

「紫陽花」
発話者：隆子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「あの大事なお約束を忘れては」 | お俊ちゃん | F | ええ | 「ええ、きっと描くつもりなの」 | 248 | 1 |

(下巻)
「アカシア」
発話者：新庄（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「――お変りになったわ・・・・・・」 | 私 | F | ええ | 「ええ、変ったでしょう、(後略)」 | 12 | 6 |

「浜撫子」
発話者：真澄（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「(前略)。あなたにアイスクリームやバナナやパインアップルやそれから珍しい異国の宝石も買ってあげましょう」 | 細島 | F | ええ | 「ええ、行けるといいわねえ」 | 50 | 1 |
| 「でも、許して下さる？」 | 細島 | F | ええ | 「ええ、許すわ、いったい、どんな事なの」 | 52 | 12 |
| 「もう、あのことは忘れて頂戴な、私苦しいから・・・・・・」 | 細島 | F | ええ | 「ええ、忘れましょう、(後略)」 | 54 | 4 |
| 「おかえりね」 | 細島 | F | ええ | 「ええ、明日」 | 64 | 16 |
| 「まあちゃん、お別れにハーモニカを聞かして頂戴」 | 細島 | F | ええ | 「ええ」 | 65 | 17 |

発話者：細島（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ええ、忘れましょう、私もちゃんと忘れるから、あなたもきっと忘れて下さいね」 | 真澄 | F | ええ | 「ええ――きっと忘れるわ」 | 54 | 5 |
| 「まあ、あんまり突然ね」 | 真澄 | F | ええ | 「ええでも、俄かにきまったのよ」 | 65 | 12 |

発話者：佐紀子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ああ、そうですの、どちらへ？お稽古？」 | 細島 | F | ええ | 「ええ、あのお琴を・・・・・・」 | 58 | 6 |
| 「海はお好き？」 | 真澄 | F | ええ | 「ええ、ずいぶん好きですの――」 | 62 | 10 |
| 「貝はお好き？」 | 真澄 | F | ええ | 「ええ、すきですの、(後略)」 | 62 | 14 |

発話者：女学生（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「(前略) 六つか七つ書けば、いいのね」 | 女学生 | F | ええ | 「ええ、そうよ、(後略)」 | 61 | 1 |

「黄薔薇」
発話者：小山（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「おや、じゃあ、貴方××へいらっしたことあるの？」 | | F | ええ | 「ええ、ちょっと行ったことがあるわ、(後略)」 | 73 | 13 |
| 「そう、小山さん、ちょっとごめんなさい、じゃ、悪口言ってよ、よくって。」 | 葛城 | F | ええ | 「ええ、どうぞ。」と小山さんはすましたもの。 | 74 | 10 |

発話者：葛城（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「(前略)。忘れずに万障を拝して上京して頂戴、よくって、会場はいずれ決定しだい御通知するわ。」 | クラス会幹事 | F | ええ | 「ええ、きっと来るわ、(後略)」 | 78 | 2 |
| 「いかがです、痛みはなおりましたかのう。」 | 眼医者 | F | ええ | 「ええ、もう、たいぶよろしいようでございます。」 | 87 | 13 |

発話者：浦上礼子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「浦上さん、あなたには学校来る前、お会いしたような気がしますけれど。」 | 葛城 | F | ええ | 「ええ、あの存じておりますの、(後略)」 | 85 | 11 |
| 「三保の松原――じゃあ、あの羽衣を天女のかけたという松のあるところですわね」 | 葛城 | F | ええ | 「ええ、そうですの、今でもございますわ、浜辺に囲いがして・・・・・・」 | 90 | 7 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「おや、そう礼子さんいらっしたことがあるの、あすこに――」 | 葛城 | F | ええ | 「ええ、昨年の夏お父さんに連られて・・・・・・(後略)」 | 90 | 12 |
| 「あ、龍華寺、あすこには高山樗牛のお墓があるんでしょう――」 | 葛城 | F | ええ | 「ええ、そうですの、外国風の真白い大理石の墓碑でしたわ・・・・・・」 | 91 | 5 |
| 「(前略)。私少女時代に暗唱したのを思い出して見ましょうか。」 | 葛城 | F | ええ | 「ええ、先生、どうぞその美しい文章を教えて下さいましな」 | 92 | 8 |

発話者：(女)

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「(前略)。忘れずに万障を拝して上京して頂戴、よくって、会場はいずれ決定しだい御通知するわ。」 | クラス会幹事 | F | ええ | 「ええ、きっと来るわ、(後略)」 | 78 | 2 |
| 「いかがです、痛みはなおりましたかのう。」 | 目医者 | F | ええ | 「ええ、もう、だいぶよろしいようでございます。」 | 87 | 13 |

「合歓の花」
発話者：順子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「あら、あの花お好き？」 | 酒井 | F | ええ | 「ええ、だって・・・・・・あの・・・・・・」 | 106 | 15 |
| 「順ちゃん、今日は酒井さん達どうなさったのかね」 | 順子の母 | F | ええ | 「ええ、ほんとにどうなさったのかしら・・・・・・」 | 119 | 2 |

発話者：大和田（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「まあ、呆れた方ね、そんな印象は卑しいわ、そんなことでなく、もっともっと精神的の美しいことよ」 | 酒井 | F | ええ | 「ええ、わかったわ、(後略)」 | 117 | 14 |
| 「あの弱々しい姿で眼の青く澄んだ細面の少し寂しい御様子の方そして黒衣のリボンの品よく似合って・・・・・・ね」 | 満智子 | F | ええ | 「ええ、その方がたしかに順子さんでございます」二人の少女は答えた。 | 125 | 9 |

「向日葵」
発話者：横山潮（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「(前略)。僕の番じゃあないのにするから、ずるいって言うの・・・・・・」 | 章ちゃん | M | ええ | 「ええ、それから章ちゃんどうしたの？」 | 134 | 4 |

発話者：関子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「え、横山さん」 | 女中 | F | ええ | 「ええ、あちらの裏の官舎の横山さんよ、明日来て下さるって御返事遊ばして？」 | 146 | 8 |

「龍胆の花」
発話者：井上（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「まあ、Ｉさん・・・・・・」 | Ｔさま | F | ええ | 「ええ」 | 162 | 9 |

発話者：T（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「Ｔさん、あなたゆうべなんだかおやすみになってから外へお出になったのね」 | クラスメート | F | ええ | 「ええ、ちょっと――」 | 166 | 9 |
| 「それに誰かまた出たり入ったり、ほんとに煩さくって安眠妨害だったわ」 | クラスメート | F | ええ | 「ええ、Ｉさんでしょ、私の後ろを用もないのにのそのそついて来るんですもの」 | 166 | 14 |
| 「(前略)、じゃあＴさんあなた困ったでしょう」 | クラスメート | F | ええ | 「ええ、だから仕方ないからいい月ねとかなんとかお座なりを言ったのよ」 | 167 | 1 |

「沈丁花」
発話者：佐智子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ね、さあちゃん、いくらそれだって、あの無いよりはいいでしょう――」 | 君恵 | F | ええ | 「ええ、――それでもうちにあれば嬉しい――」 | 188 | 2 |

「スイートピー」
発話者：佐伯（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「今いらっしたばかり？」 | 真弓 | F | ええ | 「ええ、あの父が少し悪かったものですから・・・・・・」 | 226 | 8 |

発話者：真弓（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「まだ始まるまで時間がありましょうね」 | 佐伯 | F | ええ | 「ええ、まだ二十分くらいあるかもしれないの」 | 227 | 16 |
| 「お久しぶり！きのう帰ったの？」 | 江木さんたち | F | ええ | 「ええ」 | 228 | 5 |
| 「ひとつ残りましたのね」 | 呉尾 | F | ええ | 「ええ、なんでしょう」 | 232 | 4 |

発話者：酒井（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「まあ、あなた、ずいぶん休んでいらっしゃったんでしょう」 | 真由弓 | F | ええ | 「ええ――あの、病気をしたのものですから・・・・・・」 | 248 | 17 |
| 「あなたバスケットボールはもうなさらない？」 | 真由弓 | F | ええ | 「ええ、烈しい運動は身体にいけないってお医者様に止められましたから・・・・・・」 | 252 | 5 |
| 「でも、よくなおって学校へ出ていらっしゃれたのね、もう大丈夫でしょう」 | 真由弓 | F | ええ | 「ええ、学校までよすのだったら、私死んでしまいますわ――」 | 252 | 14 |
| 「(前略)、２年にちゃんと進級もできて申し分ないでしょう」 | 真由弓 | F | ええ | 「ええ――あの休んでいる間のノーをすっかりとれたものですから・・・・・・」 | 253 | 2 |
| 「まあ、そう、じゃあクラスの方のノーとを借りて、大車輪で勉強なすったのね、よくできたこと！」 | 真由弓 | F | ええ | 「ええ、あの佐伯さんが、すっかりノートを作って送ってくだすったのです」 | 253 | 7 |

発話者：多美子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「どちらへ？」 | 青年 | M | ええ | 「ええ、ちょっとお友達までそこまで散歩――」 | 300 | 7 |
| 「(前略)、じゃあ今度のサタデーにお忘れなく」 | 青年 | M | ええ | 「ええ、ありがとう」 | 300 | 9 |

「梨の花」
発話者：少女（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「まあ、外で見たよりずいぶん高いのね」 | 少女 | F | ええ | 「ええ」 | 305 | 14 |
| 「梨の花・・・・・・梨の花・・・・・・きれいなのねえ・・・・・あんな、真白にそして仄かにぼうっとして・・・・・・」 | 少女 | F | ええ | 「ええ――でも儚げな花――近よる前に、消え入りそうな花ねえ」 | 306 | 17 |

発話者：和子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ここは、あなたのお部屋なの？」 | 真弓 | F | ええ | 「ええ、ですけれどね、私のへやなんてきまっていないの、(講略)」 | 322 | 6 |
| 「そう、やっぱり、東京が良いの？」 | 真弓 | F | ええ | 「ええ、もうそりゃ」 | 322 | 14 |
| 「そう、じゃあ、真由弓さんは、小さい時からこんな淋しい所で暮したの」 | 真弓 | F | ええ | 「ええ、そうなの」 | 323 | 4 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「あなた、小さい頃一度こちらへいらっしたって仰しゃったわね」 | 真弓 | F | ええ | 「ええ」 | 325 | 13 |

「睡蓮」
発話者：仁代（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「（前略）そしてお互いに助け合い相談し合って仲よく描いて、みましょう」 | 寛子 | F | ええ | 「ええ、じゃあそうしましょう、（後略）」 | 333 | 3 |

発話者：寛子（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「ええ、じゃあそうしましょう、二人ともほんとに一生懸命でかきましょう。当選しても、落選しても、一つの絵を一心こめて描きぬくという事は、それだけで尊いでしょうもの。」 | 仁代 | F | ええ | 「ええ、そうよ、また二人お揃いの落選したって、かまわないわ、まだ私達は若いんですもの」 | 333 | 6 |

「蔓珠沙華」
発話者：みやこ（女）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 「（前略）師匠さん行っちゃ駄目よ、あんな奴の中へ――」 | 幸ちゃん | F | ええ | 「ええ、行きやしないわ、（後略）」 | 371 | 11 |

# Usage of "*ee*" Uttered by Women in Literary Works: A Reading of *Nobuko* by Miyamoto Yuriko, *Aru Onna* by Arishima Takeo and *Hana Monogatari* by Yoshiya Nobuko

Yasuko KANAYAMA
Rica NINOMIYA

Abstract

This research examined the usage of the response "*ee*" in Nobuko (1924-1926), Aru Onna (1911-1913), and *Hana Monogatari* (1916-1924). The following aspect was found in these three works: only women used "*ee*" in daily conversation. In other words, men used "*ee*" in formal conversation only. In contrast, women used "*ee*" in both everyday conversation and formal conversation. Therefore, for men, "*ee*" is a formal responsive expression, whereas for women, "*ee*" can be used in both everyday conversation and formal conversation.

As these results support the findings of the 2018 research on *Chijin no ai* (1924-1926), we concluded that the research captures, to a certain degree, the usage and characteristics of "*ee*" from 1911 to 1924 (the late Meiji era to the Taisho era).

In the conclusion, further research questions are presented, which include an investigation on the historical changes of "*ee*" and an investigation on the usage of "*ee*" in our present time.

(Kanayama: International Christian University, Ninomiya: Chuo university)